認知症カフェ取材　第2段　vol.1
永国寺キャンパス　“ 交流・笑顔が元気の源”

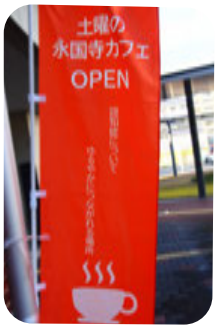
予約不要、だれでもオッケー！　会場は明るく開放的な空間。約80名の方が参加され、席はほぼ満席!!　**年齢や性別など関係なく**皆さん和気あいあいと**交流**を楽しんでいます。

今回のミニ講話のテーマは、
“高知街の歩き方！”
障がいがあっても、
高齢であっても、
赤ちゃん連れでも
“誰もが望む場所” に
でかけられる移動の
権利を保証する仕組
みについて説明。

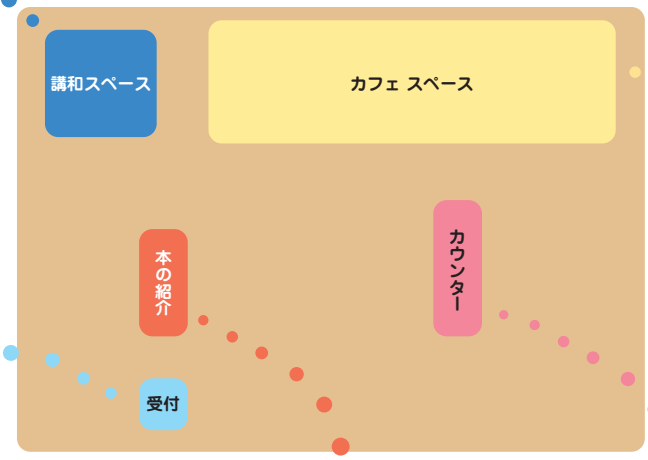
・車いすでも路面電車に乗れるのか？
・どこで福祉用具を借りるのか？
・旅行をしたいけど、行きたい場所のトイレはバリアフリーなのか？など

どんなことでも気軽に相談できる“高知県バリアフリー観光相談窓口”の紹介があり、うなずきながら、耳を傾けていらっしゃいました。

パンフレットをじっくり見ている人
「今日はどこから来た？」と隣の方に話しかけている人
上手に場を仕切る人、
ボランティアの学生と話しをしている人
皆様、各々の時間を楽しんでいます。
☆ 参加者の笑い声で場は活気に満ちています。



《会場見取り図》



認知症に関するたくさんの本がズラリ！ボランティアの方が紹介しています。貸出しオッケー！

ボランティアの方々がコーヒーや茶菓子を手際よく準備

執筆・校正　広報編集部／柳本　由美

認知症カフェ取材　第2段　Vol.2
永国寺キャンパス　“ 地域の方々の声を届ける”

●地域のボランティアの方々へお話しを伺いました

（Aさん　女性）

親しい友人が認知症になり、今は私のことを覚えていません。でも、ボランティアを通じて、人との交流の大切さや関わり方を学んで、今でも交流は続いています。

また、近所の方が認知症で怒りっぽくなり、近くに住む子育て世代の方達が不安になり、施設入所を希望していると聞きました。**地域の方々が認知症のことを理解して関わり方を知ることで対応は変わる**と思っています。

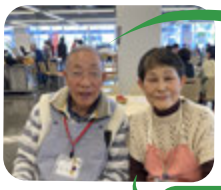
（Bさん　女性）

叔母が認知症で、以前は怒ってしまい、泣かせてしまうこともありました。

今は、認知症に対する理解が深まり、声かけの仕方などもわかり、一緒に買い物に行ったりしています。

（C夫妻）

旦那様が認知症を患い、ご夫婦でボランティアに参加されていました。お互いに想いやりがたっぷりで笑顔が素敵なご夫婦です。



旦那さま

昔学校の先生をしていました。学生時代からサボテンの栽培が趣味です。何十年も育てていました。今も人と交流をしたり、コーヒーを運んだり、お手伝いをすることが楽しいですね。

奥さま

夫が認知症になった当初は、手助けをし過ぎていると指摘されました。夫は掃除が得意で、洗濯たたみや食器の片付けをしてくれて、すごい助かっています。今では、自分から進んでしてくれます。以前よりもできることが増えましたね。

これから夫の変化にどのように対応していいのか分からないですね。でもここでは、私たちのことを知ってくれているので、困ったときに助けてもらったり、相談もしやすいです。

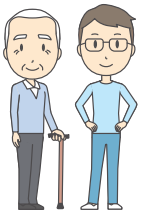
●参加している方々にお話しを伺いました

（3人ぐみの女性の方々）

ここにきて、皆が楽しそうにしている姿を見るだけでいい。家でおっても静かやし、外に出て、皆と楽しく話をすることが大切やと思います。100歳体操で知りあって、遠くから来ています。毎日、近所の方が10人ほどでラジオ体操をした後に、公園の草引きをして、公園はいつもピカピカですよ。

（Aさん　男性）

皆、100歳体操で仲良くなった人よ。俺は5つも体操しに行きゆうで。今度は認知症の勉強に行く。先月は仲のいい人がこんかったき、心配になって電話したら「用事があった」みたいで安心した。



（息子さま） お父さまと息子さまでこられていました。

父に物忘れがあり、予防を目的にきています。今ではカフェで仲良くなった男性の方が席を取ってくれています。外に出て、人と笑顔で話しをする大切さを知りました。

参加しての感想

皆さまから、家に閉じこもってはダメ。外にでて人と話しをすること、交流することが元気の秘訣と伺いました。皆さまは認知症カフェ以外でも100歳体操などで情報交換を行い、次に出かける場所・行きたい場所を話合っていました。地域の方々と交流をすることで、おのずと外出機会や頻度・遠方への外出など活動範囲は拡大していくことに気づかされました。

私たちＯＴが在宅支援を行う中ですべきことは、近所の方々の理解・協力をいただきながら、関わった方々が望む生活を知り、地域交流の機会をどのように再獲得していくべきなのか、他職種と協同し、取り組むべきことだと感じました。

広報編集部／田上　大祐

認知症カフェ取材　第2段　Vol.3
永国寺キャンパス　〝運営者、士会の想い〟

●運営の方へお話しを伺いました

理学療法士・生活支援コーディネーター
廣田　淳也 氏
(上街・高知街・小高坂地域包括支援センター)

Q 認知症カフェで大切にしていること

A ●運営には専門職以外に、地域の方々がボランティアを担ってくださっており、**当事者やご家族含めフラットな関係性を非常に大切**にしています。

●当事者の対応で留意すべき点はありますが、「今日も来てくれてありがとう」と地域住民の一人として分け隔てない関わりが大切だと思っています。**“地域の皆様とお茶をして、交流を楽しむ”そのような関係性を大事**にしています。

●皆様に食べていただくお菓子も外国のお菓子などを選んでいます。非日常の空間を演出することで、“楽しみや魅力”に繋がっていると思います。

Q ご相談の対応で留意していること

A ●例えば、物盗られ妄想などのご相談があった際に、周辺症状に至る要因を知るために、**当事者とのお話しを大切**にしています。その方を知るためにも、ご相談があれば後日自宅へ伺っています。**必要に応じて民生委員の方に定期的な訪問を依頼**することもあります。

●圏域が異なる方であれば、担当の地域包括支援センターや社会福祉協議会などへ情報をお伝えしています。

Q 地域活動に専門職種が関わる

A 介護保険サービスだけではなく、**ご利用者さまの地域活動・社会参加の場へ繋がることができる**と思います。また、“地域における人との交流機会の大切さ”を知り、様々な地域で活動の輪を広げるなど波及効果を期待しています。

Q 今後の目標

A 住民の方々が運営を行い、10年・20年先も活動が継続し、地域や人との交流がより豊かになることです。また、私たち支援者がより多くの地域で活動・支援することで、認知症に対して理解があり、住みやすい地域づくりになると思います。

●認知症班の今後の展望について

今城　可嗣

現在、認知症班は4名で活動しており、2ヶ月に1回のカフェ運営も課題が多くなっています。今回の見学を通じて感じたことは、認知症班（作業療法士）が中心となった認知症カフェの運営ではなく、各所で行われている認知症カフェに我々が参加させていただくことが良いのではないかと考えています。

認知症班の行うカフェの目的は、作業療法士を知ってもらい、あらゆる場で活用してもらうことです。ならば、地域で既に活動されているカフェに私たちから参画していくことで、間接的に作業療法士を知ってもらうことにつながるのではないでしょうか。また、カフェにボランティアや手伝いとして関わることができれば、他職種とのつながりも拡大できると思います。

様々な可能性を広げるためにも、認知症班が窓口となり、士会員の皆さまとカフェをつなぐ役割を担うことができれば、士会全体の取り組みとして波及させることにつながると思います。